

11月29日「その日、その時を望んで」マタイ 24：36~44

私が小学校六年の時に、眠れないほど恐ろしいことがありました。「ノストラダムスの大予言」今から20年ほど前ですが、世紀末には世界の終焉がやってくる、そのような都市伝説がテレビやメディアなどでも割と真剣に取り上げられていたのです。子供だましのオカルトと思われるかもしれませんが、けれども、キリスト教に似せたカルト宗教や一部の熱狂的な福音派の指導者の中には、終末とその時に救われる人数を予告して、その中に入って救われるためには入信して、～円献金しなさい、とたくさんの信者と多額の寄付を集めているところがあります。今年アカデミー賞を取ったのは韓国の「パラサイト～半地下の住人～」という映画があります。この「半地下」というのは、韓国のお金持ちの中にはある時期、南北で核戦争になった時に備えて、備えていた地下の核シェルターのことで、それが物語の一つのキーとなっています。アメリカでも同じだと聞いたことがあります。

「終末」それは確かに私たちを惹きつけるものなのです。キリスト教の世界観では、この世界は神さまによって創造され、そしていつかは終わりの時がくると考えられています。最後の時には、終末には、天へと昇られたイエスが再び下ってきて、それぞれの生き方に応じて、最後の審判をなさる、というものです。今日の聖書より少し前にはその時というのは世界中で大混乱が起き、酷いパニックが起こるといわれています。「**24：10～そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。**」ちょうどコロナ禍の大混乱の中にある私たちのようです。今日の御言葉によれば、それは、ノアの箱舟のようだとも言われています。そんなことを聞くと箱舟を用意しておきたくなるのが、人間というものかもしれません。多額の献金を奉げて神に忠実な姿勢を繕ったり、シェルターを造って備えたり・・・何とか自分たちだけは助かる方法を探すものです。「終末」それは確かに私たちを惹きつけるものなのです。

終末から何とか逃げたいと願う人々がいる一方で、あまりに辛いことや

悲しいことが重なった時に、私たちは「もうこんな世界は滅びてしまえ！終末よ、来てください」と願うこともあります。若い人たちが使うネットスラングに「バルス！」というのがあります。ジブリ映画「天空の城ラピュタ」に登場する滅びの呪文です。こんな風に使います。「あ～今日も朝から満員電車で揺られて通勤だ、バルス！」「今月の給料もこんなに少ない！もう働くのなんて嫌だ！バルス！」報われない、辛い日々が続く、もう何もかも嫌になった、そんなときに私たちは思わず叫んでしまうのです。「バルス！終末よ、早く来い！」やっぱり終末というのは私たちを惹きつけるものです。

実は、今日一緒に聴いたマタイ福音書の書かれた時代というのも、そんな時代だったと思われれます。西はエジプト、東にメソポタミア、大国間に挟まれながらも何とか小さな国家として独立を保ってきたユダヤの人たち。しかし、イエスの時代にはローマ帝国に戦争で破れ、属州として支配されていました。それでも何度か大規模な反乱が起きていましたが、イエスの死と復活と昇天の後、紀元 70 年頃から再び大きな戦争になります。急進派のユダヤ人たちは、最後の一人まで徹底抗戦しましたが、ローマの圧倒的な軍事力の前に歯が立たず、幼い最後は籠城した砦のなかで子どもや女性たちまで自ら命を絶つような悲惨な戦争になりました。町々は焼き払われ、荘厳を誇ったエルサレム神殿は破壊されます。たくさんの者たちが命を失い、生き残ったユダヤ人たちもエルサレムへ住むことを禁止されました。国家も、宗教も、何もかもを失ってしまったのでした。絶望した人たちは叫んだでしょう！「バルス！もう世界なんて滅ぼして欲しい！イエス様、早く終末をもたらしてください」この福音書が書かれた時代にはそんな人たちが溢れていたのです。

終末、それは私たちを惹きつけます。何としても自分たちだけは生き残る方法はないだろうか・・・私たちから他者を愛する気持ちを奪っていきます。一方で「もう世界なんて滅びてしまえ！早く終末が来ますように」私たちにこの世界への希望を捨てさせ、諦めさせていきます。一体どうすれば良いのでしょうか！？マタイはそんな危機の時にイエスの残された大

切な大切な言葉を私たちに思い出させてくれました。

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も（イエスご自身も）知らない。ただ父だけがご存じなのである。だから、目を覚ましていなさい！」終末、最後の時、その日、その時は御子イエス・キリストでさえ、分からないのです。であるならば、私たち人間には分かるはずがありません。ただ、父である神のみがご存じなのです！だから、その日を予言できる人間が出てくるなんて偽りも良いところです。これは、宝くじを当てたり、競馬を予想するのとはわけが違います。その日、その時をご存じなのは父なる神のみです。だから私たちがいくら滅ぼして欲しいと願ったところで無意味です。神は私たち人間の意思に左右される方ではないからです。人類滅亡の預言に眠れないほど恐怖を覚えた小学生の私は牧師であった父に尋ねました。「ノストラダムスの大予言ってほんとかな？」父は言いました。「ノアの箱舟のあと、神さまは何て言われたか覚えてる？」虹をかけて、もう二度と生き物を滅ぼすことはしないと約束されたんだよ、だから大丈夫！神さまの約束は永遠だよ」その日、その時は誰にも予想できない。誰にも引き起こせない。では、どうするのか？私たちは目を覚ましているのです。私たちはその日、その時がいつ来るか分からないからこそ、「今」、隣人を愛し、神を愛して生きるのです！先ほどの24章10節以下の最後を聞きましょう。「24:10～ そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

今を大切に生きる。私たちは本当に真剣に「今」を生きているでしょうか？私たちは過去を懐かしみ、過去の栄光にすがりついていることはよくあります。不確かな未来のことばかり気にして、今に集中できないことは多々あります。私自身を振り返ってみても、来週の予定を立てるためにスマホで調べることに夢中で、今、目の前の子どもと真剣に遊んでやれていないことがあります。先々の仕事を早めに終わらせてから楽をしようと思っているうちに、完全休養を取ったのはいつ以来だろうと思わされること

もしばしばです。この説教を聞きながらも、ランチに何を食べようか、家事の段取りをどうしようか、日曜日の午後の予定に想いを馳せている人もいるのではないのでしょうか？私たちは本当に真剣に「今」この時を生きる時が一体どれくらいあるのでしょうか？

イエスの言葉です。「マタイ 6：33～34 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。」

まず神の国と神の義を求める、これ以上に「今」すべきことはないのではないのでしょうか。今日は預言者イザヤの言葉も聴きました。イザヤも大国との戦乱が近づくなかで、人々に神が語られた遠い遠い未来の平和の姿を語りました。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」未だにこの神の国は実現されていません。そうであるならば、私たちは自分たちだけが助かろうとものがくのではなく、もう滅びてしまえと諦めるのでもなく、神の国の実現を信じて、今を生きるのです。

今、私たちが出ていく先にはコロナ禍という大混乱が待っています。先行きは見えず、闇の中を歩んでいるように思えることもあります。今私たちはイエスを本当に必要としています。ここまで話しておいて何ですが、イエスは遠い未来に仰々しく空から降ってくるだけの方ではありません。先週もお話ししました。今も最も弱い者と、最も小さくされた者と、最も幼い子どもたちと共におられるのです。そして、飼いやおけの中に最も弱く小さな幼子と言う形で私たちのもとへと来られます。この世の光として。「暗闇に住む民は大きな光を見、／死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」私たちは真剣に願い、隣人を愛し、神を愛しながら歩むならば必ず私たちはイエスに会うこととなります！その日、その時を望みつつ、今日も希望の光の中を歩みだしましょう。